# 召還者の異世界奮闘日記

銀野　臨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
召還者の異世界奮闘日記

【Ｎコード】
Ｎ８８５２Ｙ

【作者名】
銀野　臨

【あらすじ】
家でテレビを見つつくつろいでいたらいきなり異世界にトリップした翔子
なんやかんやで１年たちこっちの世界にも慣れてきて元の世界に帰る方法を探しつつ平穏な生活を送っていた　しかしある１人の訪問者によって平和な生活に崩壊の兆しが・・・？

## プロローグ（前書き）

文才もないのに勢いで書き始めた小説です
ご都合主義で強引で展開が急ではやいかもです
お目汚しにしかならないと思うんですが読んでくださったら幸いです！

# プロローグ

タイムマシンがあったらいつに戻りたい？

小学生だった頃友達にそんなような質問をされた記憶がある

あの頃の幼かった私はなんて答えたのかは思い出せない

「きっと漢字テストの前がいいな～えへへ」

というようなことを言っていただろう

もしも、いや今そんな質問をするような人は私の周りにはいないが

もしも、私が今その質問を投げかけられたら全力でそりゃもう全力

で答えるだろう

1年前のあの日に戻せと

この世界にトリップしてしまった日に戻せと

# 序章1

「シチューできましたァ！！持ってってください！！！！」

私は大声で叫ぶ。
こんなにビックリマークつけてしゃべるのなんてこの時間以外はないよなーというどうでもいいことを頭の片隅で考えつつ次のメニューに取り掛かる。

ここはアネット食堂。
小さな町フェーンの隅にある小さな食堂だ。
小さな食堂だが味は確かなので連日客で大賑わい。よってお昼時となると殺人的な忙しさになる。
だって大賑わいなのに店員が私を含めて４人しかいないのだ。
今でさえ殺人的に忙しいのに私が拾ってもらう前は３人で切り盛りしていたというのだからその忙しさを考えると鳥肌が立つ。

１年前、私はこの世界にやってきた。

その日もいつもと同じように過ごしていたのだ。
訳あって高校生なのに一人暮らしをしていた私はそろそろご飯を作ろうかな～なんて考えながらだらだらとテレビを見ていた。
そして一瞬まばたきしたらこの世界だった。本当に一瞬で来てしまったのだ。
普通異世界トリップする時って神様が現れて～みたいなくだりがありそうだがそんなもん無くいきなりトリップである。要するに説明

ゼロである。

しかもトリップした時間が最高に空気読めていなかった。
場所はアネットさんの家。そこはいいと思う。人の家だしよく小説に出てくる森とかじゃないし。
しかし！タイミングが悪かったのだ。その日はアネットさんの娘さんのお葬式の日だった。しかも弔いの儀という家族以外は絶対に立ち入ってはならない儀式の最中に。

空気を読めないにもほどがあると思う。

幸いといっていいのかはわからないがその時そこにいたのは娘さんの家族であるアネットさんとアネットさんの1人目の息子のドミニクさん、2人目の息子のアドルフくんしかいなかった。

その3人が本当にびっくりした顔をしていたのを覚えている。なんでも弔いの儀は家族以外は入れないように結界を張るらしい。なのに私が入ってきたからとんでもなく驚いたと後日言っていた。

まあ私もそれに負けないくらいびっくりしてたけどね！

でも驚きすぎた人間は逆に冷静になるようだ。
私はその例に漏れずものすごく落ち着いていた。普段でもこんなに落ち着いてねーよってくらい落ち着いていたのだ。なので周りを観察する余裕が生まれた。

そして余裕が生まれてしまった結果ある考えに至ってしまった。

これは私が好きな小説のジャンルのアレとまったく同じじゃないか？
あの違う世界にレッツゴー！なあのジャンル・・・

い、いやいやいやアレは小説の中だけだって！ありえないありえないいやでも固まってる人たち目の色と髪の色がありえないくらいカラフルだし家の作りも日本と違う。さらに決定的なのはランプらしきものが浮いていたのだ。空中に、フワーッとワイヤーも無く・・・

そこまで考えて背中に汗がつたったのを今でも鮮明に覚えている。
そして私は震えながら質問した。

「ここはどこですか？」

記憶喪失者かっ！ってツッコミが現実逃避のように脳内でとんだ。

# 序章2

私の「ここはどこ」発言でアネットさん達3人は我に返ったようだった。
固まり状態からの復活である。そこまではいいんだけどその後の行動が問題だった。なんとまあ我に返ったドミニクさんがナイフらしきものを懐から出したんだよね。
あはは・・・やっぱり普通に懐に刃物入ってる時点で日本じゃないよなぁ銃刀法違反してるくらい刃渡り長いし。
私がこんなくだらないことを考えている間にドミニクさんは私のすぐそばまで来ていて刃先を私の首元に向けていました。なんてすばやい行動。

「手、挙げろ。余計なことはするなよ？血は見たくないからな。」

もちろんソッコー挙げますよ手。だって怖いからね刃物。平凡な女子高生は刃物向けられたら言いなりになっちゃいますよ。つか物騒なセリフだなオイ。
そんなこと現実逃避じみたことを考えている私をよそにドミニクさんはおとなしく手を挙げた私を縛ろうと棚から縄を取り出していました。
しかも結構太めの縄です。紐とは間違っても呼べないくらい太い。縛られたら絶対痛いです。M気質の人以外は絶対無理ですアレ。ちなみに私はどちらかといえばSです。うん要らない情報ですね。そう、これも現実逃避です。
ってまた変なこと考えている間に目の前に縄がっ！つか私ってさっきから変なことしか考えてないな！！しょうがないかこの状況が変だもんね！！！

あーでもやっぱり嫌だよこんなの。大人しくしてたほうが良いだろうけどやっぱ嫌だ。私悪いことしてないのに何で縛られなきゃいけない訳さ！そんな趣味は無いんだよ！！

・・・あ、泣けてきた。急に泣けてきたよ私。さっきまで落ち着いてたのにね。グスッ。感情の起伏が激しいんだよね女子高生は。うー人前で泣くなんて屈辱。我慢せねば・・・グスッ。

って泣いても無視かよ！この男は！！か弱い？女が泣いてるのにシカトだよシカト。なんて冷徹なんだ。この悪魔、人でなし、鬼畜ヤローがあああああ！！！

逃げたい。けどもう遅い。縄は私の手首に巻きつけられている。そして縄が縛られる瞬間

「やめなドミニク。今すぐナイフを置いて縄もしまいなさい。」

凛とした声が響いた。

そのときの私は涙で視界が潤んでいたしドミニクさんを内心ののしる事と逃げる方法を考えることに必死だったので一瞬誰が言ったのかわからなかった。というよりここにいる誰かが私をかばうなんて思ってなかったので空耳かと思ってしまったのだ。

「でも母さん！結界を張ってるのに中に入ってくるなんてありえないだろ！？そんな怪しいやつを捕らえないなんて」

しかし目の前の男が反論しているから空耳ではない様子。まじか。かばってくれる人がいたのか。この声からして1人いた女の人だな。

「いいからしまいなさい。そんな小さな女の子泣かせて・・・。いい年した大人が何やってるの。」

女の人が言う。ああ、なんていい人なんだろう。でも小さな女の子って私一応17歳だけど。まだ小さいのか？

「泣いてるのも油断させる作戦かもだろ！？それに見た目も魔法で変えてるのかもだし！」

鬼畜男（いま命名）も言い返す。確かにごもっともですけどそんなことはありません。

「うるさいよ！もう20年近く食堂やってきた私をなめんじゃないよ！悪いやつかどうか見極める目ぐらい持ってるわ！！それとも母さんを信じられないの！？」

とうとう女の人が叫ぶと鬼畜男が黙り込んだ。どうやら女の人の勝利のようである。

言い終えた女の人は私のそばにやってきて微笑みながら言った。

「悪かったね、怖い思いさせて。もう大丈夫だから安心なさい。」

私はさっきまで恥ずかしいとか考えていたくせにその言葉と微笑みに思いっきり泣いてしまった。

## 序章3

「ほら、これ飲みな。体が温まるから。」
「ありがとうございます。」

かばって貰って大泣きした私はその後ココアらしき飲み物を飲んでました。
なぜ「らしき」がつくのかというと見た目も香りもココアなのに味がコーヒーという摩訶不思議な飲み物だったからです。絶対甘いと思ってたのに！苦かったよコノヤロー

「それであんたはどこからどうやってここに来たんだい？」

さっきアネットと名乗った女性が聞いてくる。

い、いきなり答えにくい質問を・・・
まあそこは気になるよね普通。やっぱ正直に答えるしかないよなー私嘘下手だし。へんに嘘ついても余計に疑われるだけかもだし。

「私は日本という国から来ました。何故ここに来たのかはわかりません。家にいたら急にここに来ていました。」

正直に答えてみた。そして思う。

これ自分だったら警察に突き出すわーと・・・。怪しいことこの上ないよ！

「ニホン？どこだいそこは？初めて聞いたよそんな国名。」

やっぱり聞いたこと無いんですね・・・。懐からナイフ（刃渡りが長いやつ）が出た時やココアらしきものが出た時点で確信してたけどそう実際にいわれるときついモノですな。
ああ・・・トリップ小説読むのは好きだったけどな。体験はしたくないよ。

「あの・・・ここはなんていう国ですか？教えてください。」

９９，９９９９９％確信してても一応確かめちゃうのが人間です。ここでドイツだよとかイギリスさ！とか言われたら泣いて喜ぶ。いやそれでも十分おかしいけど。自宅から外国もおかしいけどね。

「ここはフェルバンティエって国だよ。この大陸一大きな国さ。」

さて、結論。
ここは異世界です。

だって私はいたって普通の高校生だったから大陸で一番大きな国の名前くらいは知っている。でもフェルバンティエなんて国名聞いたことが無い。

「フェルバンティエ・・・。そうですか・・・。すみません私いまから突拍子も無いこと言いますが良いですか？」

さて現実を受け止めたら（まだあんまり受け止め切れてないけどね）この世界での協力者を得なければ・・・とゆーことで異世界からきたってことを話してみようと思う。だって私が知っている人はここではこの人たちしかいないだろうから。さっきも言ったとおり私は嘘が下手だから本当のこと言うしかないしね。私一回認めちゃえば

結構順応早いんです。それに割り切ることは得意だしね。
話すと決めたけど一応話す前に許可を取ってみた。拒否されたら終わりだけど。

「何を言うつもりだ？」
鬼畜男さんが睨み付けながら聞いてくる。

あ、さっきから全然触れてなかったけどこの人ずっといましたよ。んでずっと私を睨んでました。親の仇ってぐらい鋭く睨まれてました。でも触れても気分が悪くなるだけだから無視してました。この人のこと考えるよりアネットさんと話すほうが有意義だしね！
あともう一人の男の子もずっといます。この子はさっきから私をガン見してる。穴が開くんじゃないかってくらい見てます。そして一言も発さない。謎な子だ・・・。

「いや、だから突拍子も無いことです。たぶん信じてもらえそうに無いから先に確認をとってみたんですけど・・・。」
言ってもいいか聞いたのに内容を聞かれては確認の意味が無いではないか！

「話してみなさい。ちゃんと聞くから。」
アネットさん！あなたマジで女神です！！ああ・・・アネットさんがいないときにトリップしなくてよかった。そしたら普通に縄で縛られコースだったもんね。本当に感謝です。

「えと・・・じゃあ話させてもらいます。どうやら私この世界とは

違う世界から来たみたいなんです。」

意を決して私がそういうと

3人はびっくりした顔をして再び固まった。

## 序章４

「・・・はぁ？違う世界だと？何を言っているんだお前は。頭おかしいのか？」

復活を果たした鬼畜男の第一声がこれ。頭おかしいだと！？自分でもそう思うわっ

「私だってそう思いますよ。でも他に説明がつかないんですよ。私の住んでいたところにはフェルバンティエなんて国無いですし魔法も使えません。この飲み物も飲んだこと無いです。はじめて見ました。」

「そんな理由で信じられると思うのか？」

「思いません。でもこれが事実なんです。あなたたちも日本なんて知らなかったでしょう？でも私はそこで生まれ育ったんです！これは何があっても変わりません！！」

感情が高まって思わず大声を出してしまった。やっぱり女子高生は感情の起伏が激しいようです。いかんいかん。

「異世界？本当に？」

突然聞いたことの無い声が響く。

びっくりしてそっちを見るとさっきまで黙秘を貫いていた少年が口を開いていた。

「本当に異世界からきたの？ねえ本当に？嘘ついてないよね？違う世界から来たの？ねえどうなの？異世界からきたの？」

「う、うん。嘘ついてないよ。違う世界から来たよ。」

いきなり饒舌に喋りだした少年にビクビクしつつ答えると少年は

「じゃあちょっと待ってて！すぐ戻るから。」

といって部屋の奥に走って消えていった。

残された私たち3人は呆気にとられていると宣言どおりすぐ戻ってきた少年が1冊の本を手にしていた。

そしてものすごい勢いでその本を差し出して

「異世界からきたならこれ読める？」

と言った。

「アドルフ、それお前がめちゃめちゃ大事にしてた本だろ？そんな怪しいやつに見せて良いのか！？こいつが言ってること嘘かもだぞ。」

「うん。学校の先生にもらった大切な本だよ。いま僕は異空間の研究をしていて先生にそのことについて相談したんだ。そのときにこの本をもらった。異世界から来た人が書いたものらしいけど文字がここで使われてるものと違って読めないんだ。しかも不規則すぎて解明もできない。だから僕は異世界からきたっていう人がいるなら読んでもらいたい。」

アドルフくんが話す。
が、そのときの私はセリフの後半を聞いてなかった。だって異世界の人が書いた本だと！？完全に私と同パターンじゃないか！なんかヒントがあるかもしれん。絶対読ませてもらおう！って考えていたからね。

「よ、読みたいです！その本読ませてください。」

私がものすごい勢いでそういうとアドルフくんは私に本を差し出した。

私は急ぎつつでも慎重に本を開く。

そこには見慣れた文字が並んでいた。

「これ日本語だ・・・。これ私の国の文字です！」

日本語の登場に感動して涙が出そうになる。少なくとも私以外にもここに来た人がいると思うとなんだか安心した。

「本当！？じゃあ読んでっ！早く」

感動していたらせかされたので声に出して読み始める。

「えっと、《私がこの世界に来てもう2年は経っただろう。今更だが記録をつける代わりに日記を書きたいと思う。この世界に私が来たのはさっきも書いたように2年前だ。家でくつろいでいたらこっちに来ていたのだ。幸運にも村のすぐそばに落ちたので死なずにすんだ。だが、今でも、もし村の近くにある森に落ちていたら、と思うとゾッとする。　私はやさしい村の人たちに拾ってもらっていま

もこうやって生きている。本当に村の人たちにはよくしてもらっている。感謝してもしきれない位だ。早く恩を返せるようになりたいと思う。》　・・・1ページ目はこれでお終いです。」

読んでみて私とまったく同じだと思う。私も本当に一瞬でこっちに来てしまったのだ。おなじでホッとする反面2年も戻れてないと書いてあったので落胆する。やっぱりすぐには帰れないらしい。

「そんなことが書いてあったのか・・・。ねえ続きも読んで！」

どうやらアドルフくんは信じてくれたっぽい。彼がこの本持っててよかったわー。

「アドルフは信じてるみたいだけど俺はまだ信じてないからな。本当は読めて無くても読めてる振りしてる可能性だってあるんだ。」

そういやまだ一人いたよ！しかも一番手ごわいのが。

鬼畜男さーん！まだいいますか！！もういいじゃないですか。せっかく信じてもらえる雰囲気だったのに台無しだよ。

でも、この男のいってることも一理ある。実際私が読めている保証などどこにも無いのだ。

「確かに私が読めている保証などどこにも無いです。でも本当に読めてます。信じてください」

私ができることなんて信じてくれというだけだ。あーあせめてあっちの世界のものを持ってきてたらな。証明になるのに。いま証明なんてできないよ。

「じゃあ書いてもらえばいいんじゃないか？その本に載っている文字を。スラスラと書ければ彼女は本当にその文字を使っていたのだろう。今の短時間で覚えるのは無理だったろうし。」

そういってアネットさんが紙とペンを差し出す。

・・・ナイスアイデア！アネットさんもうあなた最高です。本当にさっきからありがとうございます。

私は受け取った紙にペンで《私は異世界から来ました》と書いてみた。

「書きました。どうでしょうか？信じていただけますか？」

もう本当にいい加減信じてほしい。そう思っていつもよりスラスラ書いてみました。

「・・・うん。字の形とか同じだね。なにより書きなれてる感じがあった。ドミニク兄さん、彼女は異世界から来てるよ。僕が保障する。」

アドルフくーん！あなたも最高です！！

「・・・アドルフが言うようじゃ本当なんだろうな。普段こいつは口数が少ないがその分嘘をつかねーから。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・わぁーったよ信じるよお前の言うこと！」

うおー！感無量ですわたくし！とうとう全員が信じてくれました。長かった（？）戦いも終わりです。ありがとう鬼畜男！

「信じてくださりありがとうございます。」

「べ、別にお前のためじゃねぇよっ！！！！！」

・・・・・・ツンデレ？

## 序章４（後書き）

ビックリマークが多いですね。すみません文才がないからこうやってごまかしてるんです（笑）読みにくかったらいってください。どうにかするので。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

読んでくださってる方ありがとうございます。次でこの過去の話しは終わりになると思います。ああ、早く現在の話書きたい。

## 序章5（前書き）

泣きたいです。一回書いた原稿がきれいに消えました。
やっぱ一日に2回更新なんて無茶しようとするからですかね・・・。
消えちゃったけどがんばります・・・・。

# 序章5

よくやく3人に信じてもらうことができました。

だがしかし、私の危機的状況は何一つ変わっちゃいない。あ、いや命の危機は去ったから変わったっちゃ変わったがこの異世界でどう生活していくかが何も決まってない。

ちなみにいま、私の頭に浮かんでいる案はアネットさん達に住み込みで働くことができるところを紹介してもらうことだ。今のところこれ以外浮かばないのでこれでいくしかないだろう。早速聞いてみるか！

とそこまで考えて時に気づく。

私名乗ってなくね？名前いってなかったよ。一応言った方がいいよね。

「あの、今更なんですがいままで名乗らずにすみません。私の名前は海野翔子です。海野が名字で翔子が名前です。」

「名字！？お前貴族なのか？」

鬼畜男さんが言う。え？貴族？うちはバリバリの一般庶民です。

「いえ、違います。貴族なんて身分じゃないです。こっちの世界では名字があると貴族なんですか？」

「ああ、名字は貴族様しか持つことができないんだ。ところでもう一回名前いってもらえるかい？聞き取れなくてさ。悪いね。」

「あ、いえ。翔子といいます。しょ・う・こ」

「ショウコーウ？」

「いえ、しょ・う・こです。」

「ショーコオ？」

・・・・・・・・・どうやら私の名前はこっちの世界では発音できないらしい。

「あ、じゃあシーって呼べますかね？」

シーっていうのは私のあだ名だ。海野の海から来ている。海＝ｓｅａ＝シーである。センスについては何もいわないでくれ。考えた友達が不憫だ。彼女は3日3晩考えた末にこのあだ名にしたのだ。

「シーかい？これなら問題ないね。」

よかった。友達よ！いまここでお前の努力が役に立ったぞ！！

さてずれてしまったが本題に戻ろう。

「アネットさん、このあたりで住み込みで働けるところはありませんかね？私でもできそうなもので。」

「え？住み込みで働くのかい？・・・・・・・・・・・・・・ああ、一個あったね。住み込みで食費免除で休日もあるところが。」

なにその好条件！？好条件過ぎて怖いくらいである。

「どこですかそこ！？教えてくださいっ！！！！」

アネットさんはにやりと笑って言った。

「ここ、アネット食堂さ！」

こうして私はアネット食堂で働くことになった。

ちなみにこの後ドミニクさんの猛反対劇とかがあったけど割愛。決してめんどくさいからじゃない。決して。

さらに私がお約束のごとくチートで魔力がいっぱいあって制御に時間食ったとか、その制御法を教えてくれたのがドミニクさんで結果仲良くなったとか、アドルフくんが天才過ぎて王都にあるこっちの世界で言う大学に飛び級で学費免除で行くことになったとか、あったけどそれも割愛！

うん、結構大事なことだったね。割愛しちゃったけど。

一応補足しておくといまや私とドミニクさんはめちゃくちゃ仲良しだ。私は何かあったらまずドミニクさんを頼るねってくらい仲良く

なれた。鬼畜男って言ってたのが懐かしいくらいだ。

アドルフくんは王都に先月行ってしまったが1週間おきに手紙が届くし、私とは念話という私オリジナルの魔法でほぼ毎日話しているので寂しくは無い。

まあそんなこんなで海野翔子こと、シーは異世界ライフを堪能（？）しつつ元の世界に変える方法を探しています！

## 序章５（後書き）

おわった！過去編終わりました！！
データ消えた時は泣きそうでしたが無事過去編終わりました。
これから現在が始まるので読んでくださるとうれしいです。

## 表紙～タイトル～

「今日はお疲れさん。夜は特に忙しかっただろう？大丈夫かい？」

仕事が終わって夜、アネットさんが声をかけてくれる。

今日はアネットさんが言ったとおりものすごく忙しかった。なんでも町の騎士団の給料日だったらしくてみんな外食にしたらしい。食べ盛りの男共がわんさか来て疲れました。

私は厨房で働かせてもらってるのでめんどくさい騎士たちの相手をしなくてすむがフロアのほうで働いているマリーさんとフェイトさんは大変だっただろう。ああ、マリーさんとフェイトさんというのはアネット食堂の従業員さんのことです。お二人とも美人で優しい。お菓子をくれるいい人です。

そして騎士たちは隙あらばフロア担当のお2人を口説く。なんでも出会いが全然無いらしい。私もヘルプでそっちに出たときにもうんざりするくらいお世辞を言われた。アレは本当に鬱陶しかったなぁ。日本人は褒められ慣れてないんだよ。耐えている2人はすごいと本気で思う。

あ、ちなみにドミニクさんもこの騎士団で働いています。でも彼は実は彼女さんがいるので口説いたりしてませんよ。

そんで私はさっき書いたとおり厨房で働かせてもらってます。元より一人暮らしだったんで料理は得意だったんです。さらに前作ってみてといわれたので作ってみた私の世界の料理がアネットさんの舌

をうならせましてそれ以来店のメニューに入りました。よって私はコックさんです。1年前は女子高生だったのにな・・・・・・。

今のところメニューに入ってるのはシチュー（ちょっと意外なことにこっちにはシチューが無かった。スープは普通にあるけど。）と肉じゃがもどき、プリンもどきにアイスもどきである。

なぜシチュー以外「もどき」が付くのかというと地球とは食材が違うからである。

ジャガイモなんて無かったのです。なので肉じゃがもどきにはジャガイモと食感はまったくおんなじなのに色が青色って言うなんかものすごい野菜“ヒューレ”を使ってます。なので肉ヒューレになっちゃうのだ、本当は。

それはなんか嫌なのでそのままの名前でやっているけど時々みんなに「じゃがって何？」って聞かれる。そのたびごまかしてるけど。つっこんじゃいけないことも世の中にはあるってことさ。

私的にはアネットさんの料理のほうがおいしいんだけどねー。私の雑な料理より確実に。アネットさんの料理はマジ神です！どんなにお腹空いてなくても食べれちゃうんだからもう魔法だよね。

あ、そうそう魔法といえば私はもう一個お仕事してます。チートな能力を使って魔法で便利屋さんを。

魔法がなければ解決でき無そうなことを解決するのが仕事内容。小さな女の子から依頼で木のてっぺんに引っかかった帽子をとってくれ、から騎士団の依頼で町に盗賊が来たので捕らえるのをてつだってほしいなど、ものすごーく幅の広い便利屋をやってます。

これをはじめたのはせっかくあるチート能力を生かしたかったのとアネットさんにお世話になりっぱなしだったので食費ぐらい入れたいと思ってだ。はじめて半年たつが結構好評である。

「それでシー。あんた昨日さ明日から日記つけるって言ってたけどつけたのかい？」

アネットさんに再び話しかけられる。

ほえ、日記・・・？あ！忘れてた・・・

「え、えへ、忘れてました。今から書いてきます！そのまま寝ちゃうかもしれないんでおやすみ言っちゃいますね。おやすみなさい。」

「ああ、おやすみ。私ももう寝るかな。じゃあ明日もよろしく頼むね。」

「はーい！」

階段を駆け上がりながら返事をする。

私の部屋は3階建てのアネットさんの家の最上階、3階である。前はアドルフ君と相部屋だったけど今はアドルフくんがいなくなったので一人で使っている。

んでその向かいにある部屋がドミニクさんの部屋。2階はリビングとアネットさんの部屋がある。1階はもちろん食堂だ。

階段を上り終えて部屋の戸を開ける。

私は机の上においてあるペンとノートを手に取った。

もう1年経っちゃったけど私は日記をつけることにした。もし私みたいな人がまた来た時の為にだ。私はあの異世界人の日記のおかげで生きているといってもいいくらい日記に恩があるので私ももし役立ったらと思って書くことにした。
本当はもっと前からそう思っていたのだが、なかなか忙しく書き始められなかったのだ。

「さて、タイトルは何にしよう？」

一人なのをいい事に独り言を言ってみる。だってなんか喋ったほうが思いつきそうだったからね。

「うーん、どうせならそのタイトルだけで内容がわかるようにしたいよなー。うーん・・・・」

私は悩む。タイトルなんてそんなに大事じゃないんだがなんだかこだわってしまう。
なんとなく私のシーというあだ名に3日3晩悩んだ友達の心がわかった気がした。

「うーむ・・・。よしっ！これにしよう。」

私は日記帳の表紙にでかでかと日本語でタイトルを書く

《異世界トリップ者の異世界奮闘日記》

「よし！あんだけ考えて結局なんのひねりも無いけど良しとしよう！さて早速書くかな、中身。」

こんな風に日記を書き始めた頃の私は知る由も無かった。
この平穏であたたかな日常に終わりが来ることを。

## 表紙～タイトル～（後書き）

すみません。サブタイトル変えることにしました。この話を表紙にして次から1ページにします。前の話は過去編1とかに変更します。急にすみませんでした。

# 1ページ

その訪問者は本当に突然やってきた。
そして私の平穏な日常を崩していったのだ。

その日は私が日記を書き始めて１０日くらい経った日だった。

「シーちゃーん！今度俺とお茶しようよ。もちろん俺のおごりでさ。」

「おごりとか言って後悔しても知りませんよ。私ものすごい食べるからー。　ハイッ！肉じゃが定食です。ちゃっちゃと食べて仕事行かないと怒られますよ？」

「う、こんなときまで仕事の話は出さないでくれよ。食事の時まであの地獄の訓練を思い出したくない。」

そういって青ざめた客の一人、騎士のロウフと軽口をたたきつつ次の料理を運ぶ。

今日はフェイトさんが風邪を引いてしまったためお休みで私もフロアのほうも手伝っているのだ。おかげで歯の浮くようなお世辞を言

われすぎてゲッソリです・・・。
このロウフにもお茶に誘われたがもちろん断りました。めんどくさいしね。まあロウフ相手だったら気が楽そうだけど。こんな風に軽口たたけるし。にしても今日も騎士が多い日だなー。給料日はこの間あったばっかなのに。もう忙しいんだよ騎士がいると。

そんな感じで忙しいけど和やかな雰囲気だったのだ。

だが、次の瞬間この雰囲気がぶち壊しになる。

ガチャン！！リリリリリリーン♪

急にものすごい勢いで店のドアが開けられる。リリリリリリーンはドアの上についているベルが鳴る音だ。地球にもあったけどこっちにもあるなんて最初は驚いたものだ。普段普通に開けるときはリリーン位しか鳴らないのに今のはものすごい鳴ったなオイ。つーかその扉は寿命が近づいて来てるから勢いよく開けられると壊れるかもなのよね。壊れたらどうしてくれんのよと思いちょっと文句言ってやろうとその勢いよく開けた主を見てみた。

そこには童話に出てくる王子様たちも裸足で逃げ出すようなめちゃくちゃ美形の王子様がいました。

私はそのイケメンぶりに唖然としつつもその王子様を観察する。

格好は王子というよりは騎士に近い感じの服装であった。帯剣してるし。ちゃんと防具つけているし。でもそこにいる唖然としていてアホ面のロウフとはまた違った感じである。なんかこうもっと高貴な感じ。王様に仕えていそうなイメージである。
この服装も十分すごいが顔がさらにすごかった。いい意味で。
豪華な服装に負けないくらい、というか服装を見事に引き立て役にしているくらいのイケメンさ。髪の色は金髪で目は碧眼。あごのラインはスッとしていて鼻筋も通っている。町を歩いていたら１０人中１０人の女性全員が振り返りそうなくらいの美形だ。
はー・・・まさに王子だわー。とか考えながら声をかけてみる。
「いらっしゃいませー。お一人ですか？」
声を掛けられたことに気づいたのかその王子が振り返る。
そして私を見て一瞬目を見開いた。
ん？なんか驚かれるような格好はしてないけどなー。
と思っていたが一つ私はこの世界の人と違うところがあったのを思い出した。
あーあのこと思われてるのか。なら先手を打っとこうと思い声を出す。
「あの、驚かれているようですがもしかしたらこの黒い髪の毛と目のことですか？この２つは生まれつきなのでもし気分を害されたなら申し訳ありませんがほかのお店に・・・・・・は！？」
私がセリフを中断したのには訳がある。なぜだか知らんが王子（仮）がいきなり私に跪いたからだ。

え？なに？何やってんのこの人？
周囲もいきなりの行動に唖然とする。
「あ、あの何やってるんですか？顔上げてください。」
私がそういうと王子（仮）は顔を上げて言った。
「我らが巫女姫様（みこひめひめさま）、おかえりなさいませ。僭越ながらわたくしがお迎えにあがりました。さあ城に戻りましょう。」
・・・・・・・・・・・・・・・は？こいつどうしたの？
巫女？姫？何を言ってるんだ王子（仮）よ。
周囲の心が一つになった瞬間である。

## １ページ（後書き）

主人公は騎士たちの言葉をお世辞だと思ってますが実際、彼らは本気で言ってます。特にロウフは本気です（笑）

シーこと翔子の見た目は黒髪、黒目で髪は腰ぐらいまで伸びています。また身長は１５２ｃｍとちょっと小さめですがスタイルもよく出るとこ出てます↑　顔もかわいいです。
なのでモテるんですが気がつかない彼女・・・。
騎士たち、不憫！（笑）

## 2ページ

巫女姫って何言ってんのよこの人は？王子みたいなイケメン顔の癖に頭大丈夫か？って顔は関係ないか。つーか跪かれたままだし・・・。とりあえず今の状況だと彼じゃなくて私がいたたまれない。だってはたから見れば私ってすごいイケメンを跪かせてる悪女っぽいじゃないか！とにかく現状打破のために声を掛ける。

「あのー私巫女姫？なんてものじゃないですよ。人違いじゃないですか？それとあの、立って下さい。」

そう言えば王子（仮）は立ち上がりながら

「いえ、その漆黒の夜の闇のような御髪と御眼をお持ちな貴方様が巫女姫でない訳が無いです。さあ巫女姫様、お城に参りましょう。」

と言う。

・・・・・・・・・・・この人話通じねぇぇぇぇぇぇぇ！！！違うっていってんじゃん！つーかなんだその黒色をあらわすだけなのにいっぱい言葉並べやがって。御髪と御眼なんて使う人はじめて見たわ！分かりにくいわ！目と髪でいいだろっ！しかも城に参りましょうって結構強引だなオイ。どんだけ城行きたいんだよ！！

とサイレントツッコミをしてみる。声に出してはいえないよ？チキンだから。

「いや、だから違いますって。私普通の町民です。」

「いや貴方様は巫女姫様です。」

「いやだから違うってば！」

「そんなことございません！貴方様は巫女姫様なんです！！いい加減お認めください！！！」

「あーもうっだから！私は巫女ひ「シー、落ち着きな。」「アレン、冷静になれ」

私のセリフに2つの声が入り混じる。

一つは聞きなれたアネットさんの声。
もう一つは聞いたことの無い男の人の声。

その2つの声に反応して私たち2人も動きを止める。

「シー、とりあえず落ち着きなさい。そこの騎士様も。」

アネットさんに言われて私は急に恥ずかしくなる。だって店にお客さんがまだいたからね。今の見られてたのかー・・・。うん、恥ずかしいね。
とゆーかこの人やっぱり騎士だったんだー。王子顔なのに・・・。

「いきなりうちのものが暴走して失礼した。非礼をわびよう。それで我々はそこにいらっしゃる方に話があるんだが、お借りしても？」

さっきの男の人の声が食堂の入り口から響いた。

慌ててそっちを向くと、そこにもイケメンがいました。

服装はさっきの王子（仮）と同じで、髪の色が紺色だった。目の色は緑でこれまた顔が見事に整っている。さっきの人もこの人も2人ともイケメンでかっこいいんだけどタイプが違う感じ。

この紺色の髪の人はなんかこう美人なかんじである。かっこいいし美しいんだけど明らかに自分より綺麗だから隣に並びたくない感じ。神秘的な雰囲気がある。

ってイケメン観察してる場合じゃないよね。質問されてるんだから答えねば。

「いえ、別にお気になさらず。私もですから。でも今、話というのはちょっと無理です。仕事中なので。食堂が9の刻に終わるのでその時いらしてくれますか？」

そっちが勝手に訪ねてきたんだから時間ぐらい融通しろよオラっていう意味をオブラートに包んでみた。これなら失礼じゃないよね・・・？

「了承した。ではまた9の刻に訪ねさせていただく。いきなりすまなかった。」

それだけ言うとイケメン2人は去っていきました。

・・・なんだったんだあの人たち？

なぜだか分からないが私はとても不安な気持ちになった。

なんだか急に歯車が狂い始めたような、なんともいえない気分にな

ったのだ。

何事もなく終わればいい。どうせ人違いだよ。

そう言い聞かせて扉のほうから呆然とした空気が漂う食堂内に戻った。

## 2ページ（後書き）

９の刻（こく）って言うのは９時のことです。時間はこっちと同じで２４時間制になってます。ただ９時とは言わずに９の刻といいます。６時だったら６の刻です。

何分って言うのは単位がなく１２時３０分の事だったら１２の刻の３０といいます。

といってもこの世界の人たちはほとんど太陽の沈み具合で時間をチェックしてるのであんまり時計とかは普及してません。貴族が懐中時計持ってるくらいです。

サイレントツッコミは心の中での突っ込みです（笑）彼女チキンなので声には出さないんです。

## 3ページ

「先ほどはまことに失礼いたしました。つい、巫女姫様を拝見できたことに喜びを感じ冷静さを失ってました…。」

アレン、と名乗った騎士は名乗り終わった直後にそんなことを言った。

まだ引きずるのかソレ。

今は9の刻。私は昼間いきなりやってきた騎士さん達2人と向かい合っている。

この2人が去った後食堂内はすごい騒ぎだった。

大丈夫か？と心配してくれるみんなには「きっと人違いだから大丈夫！心配しないで」と言ったが実際めちゃくちゃ不安です。つか怖い。チキンですから！！

一応騎士であるロウフから聞いた話によるとこの人たちは王城に仕えている騎士で、その中でもトップの1番隊の人たちみたいだ。なぜ1番隊か分かったかというと何番隊かは防具で見分けがつくみたい。

ああ、そんなお偉い方が私に何のようなのよ、マジで…。

内心ビックビクしながらもそんな様子は表には出さない。あんたたちになんかビビッてませんけど？っていう雰囲気をかもし出す。これは食堂で働くことになったときにアネットさんから教わったこと

だ。どんなに怖い客が来ても決して表には出さないこと。出してしまったらなめられるからだそう。

私はそんなことを思い出してちょっと遠くのほうに座っているアネットさんをチラリと見る。

そうしたらアネットさんは私を安心させるように微笑んでくれた。

隣にいるドミニクさんも頷いてくれる。

そんな2人を見たらだいぶ落ち着くことができた。よし、とりあえず誤解をとこう。

「いえ、先ほども申しましたがお気になさらないで下さい。私もでしたから。それと何度も言うようですが、私はただの町民です。巫女姫様というようなものではございません。」

ちゃんとハッキリ言えたー！これで大丈夫だろう。だいたいさー私はトリップしてきたわけで召喚された訳でもないんだしそんなねぇ…。大層なお役目なんて無いでしょう。小説でも勇者とか姫とかは大体召喚されてたしー。

そう思っていたらさっきレイと名乗った騎士さんが口を開いた。

「いえ、あなたは巫女姫なのです。黒い瞳と髪をお持ちだから。」

またでたよ！黒髪と黒い目。確かに私は目も髪も黒いけどだからなんなわけ？日本には山ほどいるわっ！なのにそれ持ってたら巫女姫って単純すぎないか？とゆーかまず、巫女姫って何？さまざまな疑問が脳内を渦巻く。

「あのさっきから黒髪と黒い目のことを言ってますけど何なんです

か？あと、巫女姫様って何なんですか？」

思ったことをそのまま口にしてみる。気になったことがあったらすぐに聞かないとね。聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥さ。

すると今度はアレンさんが話し始める。

「そうですね・・・。巫女姫様がどんなお方かを説明することになると少し長くなってしまうんですが大丈夫でしょうか？」

確認を取るほど長い話なのかよ。どんだけ長いんだよ。と再びサイレントツッコミ。でも聞かなきゃ始まらないんで聞くことにする。

「大丈夫です。お願いします。」

私がそういうとアレンさんは頷いて話し始めた。

## 3ページ（後書き）

巫女姫についてを入れようとしたらめちゃめちゃ長くなってしまったんで2個に分けました。次回、巫女姫が何なのか、とか翔子は本当に巫女姫なのか？とかが分かります！　多分↑

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8852y/

召還者の異世界奮闘日記

2011年12月3日14時45分発行